

し出来れば成蹊に入りたい、出来ぬまでも試験だけは受けさせよう——多少親の道樂氣も手傳つて——無理に成蹊を受けさせたのです。ところが幸か不幸か成蹊も許可になつたのです。するに肝腎の四十郎は表立つて成蹊に反對もしませぬが、何とんでも大塚を斷念しないのです。成蹊の話をするに厭な顔さへします。本來が少しつむじ曲りで、言ひ出すまじなく、聽入れぬ質なので、已むを得なければ先生から御説得を願はう、當分はむしろ勧めまいと暫らく問題に

觸れずに置きますと、ある日のことです。急に僕はもう小學生になるのだから赤ン坊の玩具はみなきぬ(女中の名の弟に遣つて仕舞はうと、自分の戸棚を片付け、可愛がつてゐた犬の玩具を取り出して、これはなが(女中の名)にやるのだから今日はお別れに一晩一緒に寝るのだといつて、むく犬を抱いて寢ました。妙なことをいふと思つてゐたら、この

母の言葉

前後、大塚を斷念して成蹊に行く決心をしたらしいのです。それからは成蹊にも申しませぬが、大塚々々頑張らぬやうになりました。その時はそんなに迄楽しんでゐた大塚に別れさせるのかと、少し可愛想な氣がしました。

二年間お世話になつて、振り返つて考へますと、薦の子は薦にしても、朗かに伸びよく生長し、殊に病氣一つしなかつたのは何と云ふ仕合か、感謝の念で一杯です。幼稚園は子供の智慧を附けるころといふより、健康に朗かに子供を育て、戴くころと豫てから考へて居るのです。智慧は抛ついても附くが、健康に朗かに育てることは、私共の少い経験から申しても、決して容易のことはありません。それが豫期以上丈夫にしていたゞき、今幼稚園にお別れするに當り、ごちらの小學校にしようかなと贅澤を申して居るのであります。こんな仕合が又ござりませうか。

西川 ぎよ子

哲彦を幼稚園に通はせ始めてからもう二年といふ年月が

経たうとして居ります。二年と云へば長い様で短い年月で

ございます。此の短いけれど貴重な二年間の幼稚園の生活、この生活に依つて、哲彦は種々教へられました。獨り哲彦のみでなく、親もして、殊に母親もしていろいろ教へられた二年間でございます。如何なる事を、如何なる段階を経て教へられ、又それが如何なる事に役立つかといふ事を總て今知り盡す事は出来ません。「かういふ事は幼稚園のお蔭だ。幼稚園で養はれて来たからこそかういふ場合にかうするこゝが出来たのだ。」と、これから先學校生活に於ても又つづき先へ行つてからも母親が、又自分が思ふ事は數々あるでございませう、けれど今はさういふ事を測り知る事は出来ません。しかしそれは別として、現在ほんの目の前に見える事だけを考へても深く幼稚園の御恩といふ事を感じます。次にほんの少しながら現在の哲彦を觀て、感じた事を書かせて戴きます。

第一には健康になつた事でございます。親も兄弟も一體に健康に恵まれて居り、哲彦も世間でいふ虚弱兒ではございませんでしたが、外の兄弟と較べてみた時はいくらか神經質でちよいと病氣もし、決して死ぬか生きるかといふ

大病ではございません。外の兄弟にはなかつた引きつけるといふ事もございました。けれど幼稚園に通ふやうになつてからは、毎日の生活が規則正しくなつたので身體がすつと丈夫になり、今までひよろ／＼と瘦せて居たのが、肉も附いて来て、がつしり／＼と參りました。そして此頃では殆んど、病氣らしい病氣は勿論、ちよつとした風邪さへも引かず、大抵の人が罹つた今度の流行性感冒にも罹りませんでした。

又身體の丈夫になつた事につれて元氣が一層出て来て、時には元氣過ぎると思はれる位、元氣ある子供になりました。

この規則正しく生活するといふ事は營に身體の上ばかりでなく、又、心の上にも大きな結果を齎してゐるを考へられます。

次には子供として、その年頃の子供として相應しい常識が圓滿に發達した事でございます。哲彦は小さい時からちよつと風變りな子供でした。云はゞませた子供でございました。これは上に大きな兄弟が多いといふ事も影響して居

るかも知れませんが、さういふハンドキャップを除いてもなほ普通その年頃の子供としてはませてゐた様に思はれます。ませてゐるこゝ口に云つても、いろ／＼のませ方もあつてせうが、哲彦の場合は例へば親さか、又兄弟達が話をしてゐる。その話は子供が聞いても別段分りさうもない、従つて面白くもないと思はれる（實際さういふ場合外の子供がゐてもその子供はすぐ向ふへ行つてしまひますが）、話を分るのだから、分らないのだから、こちらには見當が付かない様な話を熱心に聞いて居たりしました。今考へて見るこゝ話が面白いので聞いたのではなく、話を聞いてゐるこゝいふ事が好きであつたのかも知れません。

又何からさうして覺えたのだから、その場合聞かれた者がびつくりする様な難しい事を云つたり、又質問したりするかと思ふに、案外な事に丸つきり、知識がなかつたり云つた風な子供でございました。しかし幼稚園に行く様になつてからはかういふ點が両方から歩みより、平均されました。つまりその年頃の子供としての常識が發達して參りました。けれど、やはり幼稚園へ通ふやうになつてもはじめのう

ちは、なんだか分別臭い顔をして外の子供達が遊戯をしてゐるのに、一人ぼつんこ腰かけて、それを見てゐたりした事もございました。後で「さうして今日皆さんと一緒にしなかつたの」をきいて見ましたら、あれはあんまり赤ん坊くさい（適當な言葉ではございませんが、つまり幼稚に見えたこゝいふ意味でございます）からしなかつたこゝいふ様な事を申して居ります。けれど今日ではもうかういふ事はすつかり無くなつた様でございます。これには種々な事が原因してゐると思ひますが、家庭に居る時とは異つて、幼稚園では自分と同年の子供の間で、共に半日の生活をするのでございますから、自分一人でぼつんこしてゐるわけには行かすいろ／＼の點でませた所なきがだん／＼と無くなつて、子供らしい子供になるのでございませう。この同年の子供と共に生活するこゝいふこゝは子供にまつて、本當に必要な事と思ひます。よく世間には幼稚園へやる必要はない。幼稚園で教へる事ぐらい家庭で充分教へる事が出来るではないかこゝいふ人がございますけれど、決してさうだとは思はれません。世間には毎日、毎時、子供につきつきり居られる

親ばかりはないし、(最もこの事がいゝ事さも云はれませんが。)又さういふ親が又、兄弟なりがあつたにしても、さう

いふ人は幼児から見れば全くの大人であるしさういふ人が子供の相手をして、それは全く指導者の立場だけに立つて居るのでございますから、さうしても、よつぼさその事の方に氣をつかはなければ、さうしても片よつた教育しか出来ないのではないでせうか。勿論中には指導者の立場のみではなく、子供の友達としての立場にも立ち得る人もございますでせうけれど、(さういふ人こそ眞に立派な教育家でございますが。)さういふ人は滅多にないのではないでせうか。たゞひ、頭の中には、さういふ考へは持つてゐても、それを實際行へる人は極く少數なのではないでせうか。私にはかう思はれるのでございます。しかし、幼稚園では、その友達になり得る指導者も、又ほんさうの友達も居ります。自分自身(子供が)と同じ様に考へ、興味を覚え、喜び、或る時に分らずやをいふ、精神的にも、肉體的にも殆んど等しい友達が。かういふ條件を備へてゐる幼稚園で、さうかするにその條件の殆んど半分が、否それ以上の缺け勝ち

な家庭を比較して考へる時には、さうしても、出来る事なら幼稚園へ通はせた方がよいと思ひます。

又そんな理窟張つて考へなくとも子供は、同年輩の子供と共に遊ぶ事を喜んでかさいふ一事を考へたゞけでも、大人ばかりの家庭に置くより、子供の大勢居る外へ、(理想は幼稚園)出した方がいゝと思ひます。子供の喜ぶ事には何かしらよい事が含まれてゐるのですから、又同年輩の子供と共に生活するさいふ事は前に申述べた事の外にも、種々大きな事を齎して居ります。細かく考へて見れば實に澤山でございますけれど、その二、三をつまんで見れば先づ反省する心が起り、その例を手近に求められるさいふ事でございます。つまり、幼稚園の友達には、自分と比較して、ずば抜けて勝れた子供も居ないし、又特別分らずやの子供も居りませんつまり、勝れた點を持つてゐる子供があるにしてもその勝れた所は、自分には(子供が)及びもつかない、想像もつかない高いところにあるのではなく、自分も努力すれば行き着く事が出来るさいふ程度だし、又それと反対の悪い所も、自分も、ひよつとさうするにさうなる可

能性を多分に持つてゐるこいふ程度でございます。かういふ事は誰さんがしたけれごそれはいゝ事だから自分もしやう、かういふ事は悪い事だから自分はしない様にしやう、すぐ、自分に引き較べて反省する事が出来ると思はれます。

又同年輩の子供と團體生活をするのですから、自分のしたい事ばかりも出来ません、多少なりとも我儘を抑へなければなりません、つまり我儘がなほる事になります。

以上の様に同年輩の子供と共に生活するこいふ事は、本當に意味のある大切な事だと思ひます。そして幼稚園の特長の大部分はこの中に含まれてゐるを考へられます。

さて、今度は別な立場から考へて見ます、親としての

雑感

数多い女兒をもちながら誠に運あしく、お茶水の學園には、これまで遂に御縁がございませんでした。せめて最後

立場からは親馬鹿、井の中の蛙の例に洩れず、幼稚園へ上げる前までは、自分の子供が總ての點で外の子供より勝れてゐるを考へて居りましたが、大勢の中に出して見て、他の子供と比較して、はじめて外の子供の勝れた點、自分の子供の勝れた點なきが分り、自分の子供の位置(その年頃の子供として勝れてゐるか普通だとかいふ程度)がはつきりして、なほ一層親として心掛けなければならぬこいふ事が分ります。以上の如く、哲彦の幼稚園生活に依つて、哲彦が又哲彦を通じて母親が、如何に教へられたかこいふ事を考へるに今更ながら、幼稚園の御骨折の大きい事を思ひ深く感謝いたして居る次第でございます。

一 幼兒の母

の一人でも、きうかしてこの系統的に一貫した女子教育を受けさせたいものこの、兩親の切なる望をもつて、昨年